

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第 97 号

2026 年 9 月

日本薬史学会 2026 年会(仙台)のご案内 (その2)

日本薬史学会 2026 年会(仙台) 年会長 佐々木健郎

2026 年会の開催地・仙台は仙台藩の藩祖伊達政宗公が開かれた大変風光明媚な街で「杜の都」とも呼ばれます。誰もが一度は耳にした名曲、『荒城の月』。作曲は、滝廉太郎、作詞は仙台出身の詩人・土井晩翠で知られます。土井晩翠は仙台市の出身で諸説がありますが「荒城の月」の作詞の際には、仙台の「青葉城」に想いをはせたとされています。年会会場の東北医科薬科大学の校歌は土井晩翠の作詞であり、構内には明治の文学者である高山樗牛と土井晩翠、笹川臨風の三人が何度も集い、青年期の想いを語り合った場所として有名な「瞑想の松」があります。その歌碑には「いくたひか こゝに真晝の 夢みたる 高山樗牛 冥想の松」と刻まれています。東北医科薬科大学の校章、公式ロゴにもこの「瞑想の松」が3本のラインと共にデザインされています。本年会では一般口演(口頭・ポスター)の他に薬の歴史とその社会的意義を広い視野からとらえた特別講演を2題予定しております。

◇特別講演 1

「伝承の和漢薬 塩釜蜜紅華湯」

田村 博義 先生(元 塩釜蜜紅華湯株式会社 会長)

◇特別講演 2

*本公演は、一般の方も無料でご聴講いただけます。

「毒と薬と私たちの歩み ～薬毒同源～」

船山 信次 先生(日本薬科大学 客員教授・日本薬史学会 会長)

いずれも薬の持つ力が個人の健康だけではなく社会や歴史そのものを再認識させてくれる内容であり、多くの示唆を得られるものと期待しております。また、9月27日(日)には「薬史ツアー」として、仙台駅付近発着のバスツアーを企画しております。コースは「みやぎの明治村」と呼ばれる宮城県北部の登米市を中心に、薬史に関わる歴史的な意義を持つ名所を訪ねます。日本遺産「みちのく GOLD 浪漫—黄金の国ジパング、産金はじまりの地をたどる—」日本初の産金地である涌谷町の天平ろまん館では学芸員から、明治村懐古館 蔵の歴史博物館では伊達家ご当主様からの歴史のご講和と専門員からの説明があります。昼食は登米の郷土料理をお楽しみいただき、帰路の途中では東松島の道の駅へも立ち寄る予定です。薬史研究に新たな視座を加える機会となると確信いたします。

本年会は、東北医科薬科大学小松島キャンパスを会場として行われますが、季節的に多くの観光客が訪れる季節であり、例年ホテルの宿泊などが困難になってくる状況があります。年会事務局では宿泊ホテルの斡旋も行っておりますが数が限られており満室になり次第締め切りとなりますのでお早い予約をお願いいたします。また、大学へのアクセスは学会 HP(2026 年会)でご案内しております。バスの時刻表等はアップデートしながら掲載しておりますので直前のご確認を必ずお願いいたします。情報交換会

も含め、会員同士の親交を深め、世代や領域を超えた知的な交流の場となるように鋭意準備を進めております。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

参加登録：薬史学会ホームページでご案内の通りです。ホームページのご案内に従ってご登録ください。

【年会参加・懇親会参加・宿泊幹旋・薬史ツアー参加について】

<https://plaza.umin.ac.jp/yakushi/event/nenkai/>

<事前参加の締切>2026年9月14日(月) 23:59

講演を申込される方も、参加登録は別途必ず行っていたくよう、お願い致します。

事前参加登録期限以降は、当日料金となり、現金での対応のみになります。当日の受付の混乱を避けるためにも、事前参加登録にご協力をお願いいたします。

登録方法：

■ Google アカウントをお持ちの方

Google フォームからご登録ください。

>登録用 Google フォーム

■ Google アカウントをお持ちでない方

年会事務局まで電子メールでご連絡ください。申込内容については、個別にメールで返信いたします。

E-mail アドレス shouyaku@tohoku-mpu.ac.jp

【年会参加・懇親会参加・宿泊費・薬史ツアーの事前精算】

精算方法：年会参加、懇親会参加、薬史ツアーの費用は、まとめてお振り込みください。振込手数料は、ご負担ください。

銀行名・支店名：七十七銀行 東勝山支店(しちじゅうしちぎんこう ひがしかつやましてん)

口座名義：株式会社トラベル e旅

(カ トラベル イイタビ)

口座番号：普通 5016078

お問合せ窓口：株式会社トラベル e旅 佐藤 芳郎

E-mail：yoshiro-sato@travel-e-tabi.com

※登録確認、入金確認等は、電子メールにてお問い合わせください。

【年会参加費】： 薬史学会会員	事前登録	5,000円
	当日登録	6,000円
共催団体会員	事前登録	5,000円
	当日登録	6,000円
非会員	事前登録	6,000円
	当日登録	7,000円
学生・大学院生	事前登録	無料
	当日登録	無料

【薬史ツアー】

日 程：2026年9月27日(日)

参加費：12,000円(昼食代込み)

【懇親会】

日 時：9月26日(土) 18:00～20:00 (予定)

場 所：JR仙台駅周辺の飲食店(参加者数確定後に決定)

参加費：7,000円(確定)

【優秀発表のご案内】

※口頭発表とポスター発表の全ての発表から、優秀発表を選出します。

※表彰は、2027年の日本薬史学会総会にて行います。

【宿泊案内】

旅行取扱者：株式会社トラベル e旅

(宮城県知事登録第2-408)

〒980-0802 宮城県仙台市青葉区二日町12-21
シントウ二日町ビル2階3号

担当者：佐藤 芳郎(さとう よしろう)

問合せ：TEL 022-797-5005/FAX 022-797-5006

E-mail：yoshiro-sato@travel-e-tabi.com

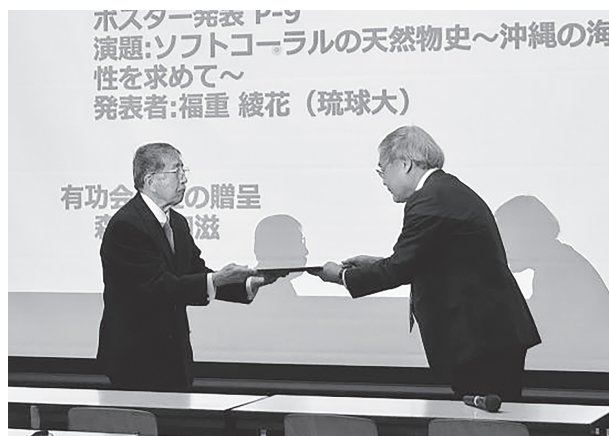
<総会等報告>

4月18日(土)に東京大学薬学講堂にて、理事・評議員会、総会が行われ、役員・委員改選と優秀発表者の表彰式、有功会員の贈呈式が行われました。



優秀発表者の表彰式
左は日本薬史学会2025年会(静岡)年会長 桐原正之教授

お声を掲載いたします。議事詳細は薬史学雑誌61(1)青ページの会務報告をご覧ください。



有功会員贈呈式
森本和滋前会長への有功会員証の贈呈／右は船山信次会長

日本薬史学会優秀口頭発表賞 抄録

過去の疾病の病原体解明は出来るのか?天然痘を例に

東京慈恵会医科大学 医学部 加藤茂孝

1. はじめに

天平9(737)年の疫病は、天然痘と推測されているが、麻疹や水痘説もある。最近、人骨からの病原体DNAの検出と同定が出来るようになってきた。

2. 症状の記載からの判定

太政官符によれば、「初期には、病床で3-6日後に発疹が出てくる。熱くなり焼かれるように感じる。発疹が消え熱も下がると下痢が起こる。他に、咳、嘔吐、吐血、鼻血があると書かれていた。天然痘ウイルスは皮膚の最下層で増殖して組織を破壊するため、発疹は痂皮となって回復し、瘢痕が残ることが多い。水痘も痂皮ができる。太政官符には天然痘に特徴的な痂皮や瘢痕のことは書かれていない。麻疹の発疹は免疫反応によるもので痂皮にはならない。下痢や咳も麻疹で見られ、水痘では稀であ

る。太政官符の症状は麻疹にあてはまる」(山内一也2024)。

3. ウイルス遺伝子から見た病原候補ウイルスの人類社会への出現時期

1)天然痘 古人骨からのウイルスDNA配列を加えた系統樹では北欧では6-7世紀に新たな拡散の分岐があった(B Mühlemann 2020)。

2)麻疹ウイルスは牛痘ウイルスから紀元前6世紀に分岐しており(A. Duex 2020)、8世紀の日本には届いていたと思われる。

3)水痘ウイルスは、7万年前に現生人類がアフリカからアラビア半島に到達した時すでに、神経組織に潜伏していたと推測されている(C. Grose 2012)。

4. ラムセス5世が最古の天然痘患者でありうる可能性

紀元前1157年BCに死亡したラムセス5世は、ミイラに見られる膿疱から天然痘死と言われた。ミイラの上半身を詳しく調べた所、直径2-4ミリの盛

り上がった膿疱が、主に顔の下半分、頸、両肩に存在し両腕にも認められた。天然痘に特徴的な手のひらの膿疱の存在は、両腕が手のひらを下にして組まれていたため、確認できなかった(D. Hopkins 2002)。

日本薬史学会優秀ポスター発表賞を受賞して

琉球大学大学院 農学研究科 福重綾花

この度は、日本薬史学会2025年会(静岡)において優秀発表賞という名誉ある賞を賜り、身に余る光栄に存じます。

私は現在、天然物化学を専攻し、日々分析機器と向き合いながら研究に励んでおります。学問の分類上では、歴史学とは一見距離のある分野に身を置いておりますが、実のところ幼少期より歴史に深い興味を抱いてまいりました。歴史番組を視聴したり、歴史上の人物に関する書籍を読んだり、博物館を訪れて歴史に触れたりすることを楽しんできました。「来世では考古学者になりたい」と周囲に話すほど、私にとって歴史は常に身近で魅力的な存在であり続けています。

そのような背景を持つ私にとって、今回、薬史学会という場で自身の発表を評価していただけたことは、現在の専門分野と幼少期から抱き続けてきた歴史への憧れが交差する、この上なく幸せな出来事でした。これまでも研究の背景を理解するために先行研究を紐解く機会はありませんでしたが、それは主として

最新の知見を把握するためのものでした。

今回の発表では、ソフトコーラル由来の抗炎症物質の探索研究とその歴史について報告いたしました。天然物から有用な医薬資源を見いだそうとする試みは、古くから人類が自然界の生物を医薬資源として活用してきた歴史の延長線上にあるものです。今回の発表準備や学会での議論を通じて、現在取り組んでいる研究もまた、長い医薬の歴史の一端を担う営みであることを改めて認識いたしました。本学会への参加は、単なる研究発表の場にとどまらず、自身の研究をこれまでとは異なる視点から見つめ直す貴重な機会となりました。

今回の受賞を励みとして、歴史への敬意を忘れることなく、より一層精進してまいります。そして、人類の発展に貢献できる成果を追求してまいります。最後になりましたが、ご指導を賜りました先生方、ならびにご選出くださいました先生方に心より厚く御礼申し上げます。

新しい風を感謝して

森本和滋

4月18日15時20分東京大学薬学部講堂で、船山会長より、有効会員に推戴されました。

総会では、表題のタイトルで短くご挨拶をさせて頂きました。この10年を振り返ります。

2016年1月、津谷会長が緊急入院され、三澤会長代理から、PMDAに電話を頂き、国際委員長の

推薦を受けました。

2019年4月、新型コロナウイルス感染症の緊急事態宣言発令の中、4月24日の総会(Web会議)を経て、第8代会長に就任しました。当方に任された使命は、長く続いている会員減少傾向を止め、魅力ある学会にすること、中堅会員が活躍できる場の醸

成、女性会員の各種委員や幹部への登用、PubMed再掲載を目指して薬史学雑誌レベルアップ、ISHPとの連携強化、70周年を迎える記念事業計画、最後に10年振りの会員名簿の作成も至急の必要と考えました。

小清水総務委員長と連日知恵を出し合いながらメール交信や、時には電話で「2021年の学会活動に向けて：コロナ禍でオンライン講演会の加速」(薬史レター 86号)を諮りました。

2021年4月17日、御影企画委員長のご尽力で、総会講演会が開催され、45名が参加。

2021年8月25日、伊藤広報委員長の下で、HPのWebサイトリニューアル契約締結、本経費は、年初予算に組んでなかったが、重要性が高いので、辰野理事等からの寄付金を充てさせて頂きました。日向広報委員(当時)のご尽力で、動画も掲載可能となりました。

2021年10月23日、日本薬史学会2021年会(千葉)を「発奮気力初志貫徹」の気持ちで松崎年会長は、成功裏に導いて下さいました。基調講演「COVID-19が、日本薬史学会に教えてくれていること」が動画サイトに掲載されました。

2021年12月末には、「会員名簿2021」が、横山財務・

会員管理委員長の下で刊行されました。一般会員数は、2015年から2021年にかけて、260名から209名に激減しました。その後プラトーになり、再び、2023年には222名と増加に転じ、HPや動画を見て入会して下さる方も有りました(70周年記念号座談会)。

今回の総会で、船山会長の下、多くの新しい常任理事会メンバーが加わりました。新しい風を感謝して退任出来ることを心から嬉しく思っております。

12月には、80歳を迎えます。使命感と責任感の醸成をキーワードに、薬史学研究を続け、ISHPや年会で発表し、出来れば、英文での論文に纏めておきたいと願っております。

多くの出逢いと離別を経験させて頂きました。ご厚情を心から感謝しております。

特に、離別を通して、突然のお別れは、悲しく辛いことでした。ご冥福をお祈りしてます。

荒木二夫先生、奥田潤先生、木村由香先生、竹中祐典先生、寺田 弘先生、土岐隆信先生、御影雅幸先生、水野瑞夫先生、山川浩司先生、山田光男先生。 合掌。



役員新任挨拶

常任理事(企画委員長)就任の挨拶

厚味巖一

この度、宮崎生子先生の後任として、企画委員長を拝命し、身に余る光栄に存じます。2024年に東京での70周年記念の薬史学会をお世話させていただいたことをきっかけとし、薬学の歴史の面白さに目覚めました。これまでに様々な講演会に出席させて頂き、学ばせていただく立場でございましたが、これからは、講演会などを企画運営する立場として、日本薬史学会のさらなる発展に寄与してまいりたいと考えております。引き続き、ご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

常任理事就任のご挨拶

佐々木健郎

この度常任理事に就任いたしました東北医科薬科大学薬学部生薬学教室の佐々木健郎です。日本薬史学会2026年会を9月にお世話させていただきます。薬学の歴史については、薬学部に学生時代から籍を置いていることから、これまでお世話になってきた諸先生方からお話を伺う機会は多くありましたが、もっと深く薬史を学ぶ必要性を感じておりました。今後は本学会の活動を通して後進に薬学の歴史を伝えていくことの重要性を訴えていきたいと考えております。ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

理事就任にあたって

清水眞知

新緑の美しい季節を迎えましたが、近頃は天候不順が続いております。

会員の諸先生方におかれましては、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

このたびの役員改選に際し、新たに理事を拝命いたしました清水眞知でございます。

日本薬史学会は、1954年の創立以来、時代の変化に柔軟に対応しながら薬学の進歩・発展に多大な貢献を果たしてこられました。

浅学非才の身ではございますが、本学会が培ってきた学術的知見を地域社会へ還元し、地域の健康増進と福祉の向上に貢献できるよう努めてまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

監事就任のご挨拶

江戸清人

このたび、日本薬史学会監事を拝命いたしました仙台医健 & スポーツ専門学校非常勤講師の江戸清人と申します。日本薬史学会監事の一人としていただき、誠に光栄に存じます。

薬史学は、医薬の歩みを通じて社会・文化を解明する学際的な学問であり、果たしてきた役割は極めて大きいと常々感じております。先人の知と経験を検証し、医薬に関わる現在と未来をより良いものとするための貴重な基盤でもあります。

私は、会務の適正執行と公正運営を見守る立場から、学会活動の一層の充実と発展に尽力してまいります。よろしくお願い申し上げます。

監事就任のご挨拶

横山亮一

今年度より監事を務めさせていただくことになりました横山亮一です。

昨年度までの8年間、財務・会員管理委員長として学会運営に携わり、学会の継続的な発展には、財

政の健全化と会員数の着実な増加が重要であることを学ばせていただきました。

会員の皆さまのご支援のおかげで、年会費のご納入やご寄付等により毎年の繰越金が徐々に増加し、新規会員も継続的に入会いただいております。その結果、学会として新たな事業に予算を配分できる体制が整いつつあり、学会活動の幅が広がっております。ここに深く感謝申し上げます。

また、2021年度より学会事務局から会員管理実務の引継ぎがあり、財務・会員管理委員会の担当業務が増えています。今後も会員管理担当として、荒井財務・会員管理委員長をサポートさせていただきます。

監事として、学会運営の健全性を意識しながら、より良い学会活動の実現に向けて、微力ではございますがお役に立てるよう努めてまいります。

引き続き、会員の皆さまのご支援・ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

評議員就任のご挨拶

辻 大和

この度、評議員に就任しました東京大学東洋文化研究所の辻大和です。私の専門は歴史学で、特に韓国朝鮮の薬用植物の利用に関わる歴史を研究しています。日本薬史学会では年会発表や論文投稿をさせていただきました。勤務先の東大東洋文化研究所は本郷にあり、図書室には中国、朝鮮の本草関係書が少なからずあります。平日限定開館ですが、予約不要ですので、ご関心のある方はお気軽にお越しください。これからもご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

評議員就任のご挨拶

山本卓司

この度、評議員に就任いたしました(株)マトリクスームの山本卓司です。評議員にご選任いただき、大変光栄に思っております。現在、産業界での活動とあわせて、北海道大学客員教授として研究・教育

にも携わっております。この二つの立場を活かし、学術と実践の両輪から学会の発展に貢献したいと考えております。皆様から多くを学びながら、会員の皆様にとって活気ある学会づくりに向けて、精一杯努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

総務委員就任のご挨拶

詫間浩樹

今年度より総務委員を拝命いたしました。大学の研究室時代には教授の他、柴田先生、山川先生、川瀬先生、末廣先生、高橋先生、竹中先生、中村先生、山田先生をはじめ、温厚和平な名伯楽の先生方の温かいご指導と多くのご薫陶を賜りました。長年にわたり学会を支えてこられた諸先生方に深く敬意を表すると共に、これまで頂いたご厚情へのささやかな恩返しとなれば幸いに存じます。総務委員会のご経験豊かな先生方と共に、先人の先生方の築かれた伝統を尊びつつ、微力ながら尽力して参ります。今後ともご指導のほどお願い申し上げます。

国際委員就任のご挨拶

夏目葉子

2010年に日本薬史学会に入会し、これまでに大

先輩方とともに国際薬史学会へ参加してきました。そこでは、アジア諸国の薬学に特化した歴史研究はまだあまり進んでいない状況です。しかし、第二次世界大戦後に目覚ましい発展を遂げた日本の薬学史が世界から特に注目されていることを知りました。海外の薬学史を理解するためにも、海外薬史学会との双方向の交流をどう進めていくかが重要だと考えています。その実現のために、委員長をはじめ各委員の豊かな経験から培われた発信力を、一から学ばせていただくつもりです。

北海道・東北支部事務局長就任のご挨拶

村田清志

この度、北海道・東北支部事務局長に就任しました村田清志です。2022年に船山信次先生のお勧めにより本会に入会して、2023年に評議員・柴田フォーラム委員、その後企画委員をさせていただき現在にいたります。大学卒業後は食品添加物企業、健康食品企業、現職の大学と所属は変わりましたが、仙台市在住で研究環境におりましたので何かのお役に立てると良いと思います。今回の支部再立ち上げに寄与できますよう、会長、支部長、そしてみなさまの活動を支えていきたいと考えております。ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

中部支部だより

令和7年度日本薬史学会中部支部例会・講演会の報告

中部支部長 河村典久

日 時：令和8年(2026年)2月21日(土)

13:30～16:30

場 所：「ウインクあいち」11階・1106室

【例会】

- ・参加者：13名
- ・支部役員の交代

支部長(理事)：河村典久

事務局：くすり博物館 立松和晃

顧問：森田 宏

- ・中部支部・飯田耕太郎事務局長への感謝状贈呈
- ・静岡理工科大学での薬史学会2025年会の報告
- ・その他

【講演会】

演題①：『インドアーユル・ヴェーダ処方集(The Ayurvedic Formulary of India)』におけるカルヤーナカグリタの調合 夏目葉子

【概要】インドアーユル・ヴェーダ薬局方とインドアーユル・ヴェーダ処方集についての詳細な解説と、

インドにおける日常用いられている生薬の解説と実際の生薬の回覧があった。インドでは漢方のような水剤は殆んどなく、油脂を用いた製剤が多く用いられている。

発表後インド生薬の品質についての活発な意見のやり取りがあった。

演題②：「丹波修治の出生と丹波家の家系」

河村典久

【概要】今回修治の誕生について新たな謄本が見つかり、実父は木村和平衛の次男であることが判明した。また、誕生から成人になる迄の養子先の変遷が明らかとなった。最初に養子となった犬飼家ではその後

犬飼家に長男が誕生して饗庭家の養子となり、さらに最終的に饗庭家と親交のあった川北の丹波家の養子となった。養子先の丹羽家の先祖について、現在の子孫宅での資料の解説から先祖の初代からの家系迄推定し、たどることが出来た。

演題③：「鎌倉・室町時代の医療とくすり」

稲垣裕美

【概要】内藤記念くすり博物館に所蔵される膨大な資料から、鎌倉・室町時代の医療がどのようなものであったのか、また、そこで用いられていた薬についての詳細な解説があった。

「海外の薬史学会の今(17)」 米国

国際委員会 夏目葉子

米国薬史学会は、米国薬学史研究所(American Institute of the History of Pharmacy: AIHP)が運営している。AIHPは1941年にUniversity of Wisconsin-Madison School of Pharmacyに設立され、今年設立85周年を迎えた。2019年には、Gregory J. Higbyがリーダーシップをとり、44th International Congress for the History of Pharmacy; ICHPがワシントンD.C.で開催され、翌年には大規模な組織改編が行われた。それにとともに、機関誌名もPharmacy in HistoryからHistory of Pharmacy and Pharmaceuticalsへと改め、広義の薬学および医薬品の歴史に関する学術的な原著論文を掲載している。対象となる分野は、薬局実務、薬学教育、医薬品規制、医薬品や薬に関する社会的・文化的側面、製薬産業(医薬品・薬剤・治療法)の歴史といった薬学に関連するあらゆる側面を含む。ニュースレターは、季刊で配信されており、機関誌の編集長とAIHP事務局長を兼任するLucas Richertは自身の職務における専門的経験や旅を綴る不定期連載をもち、当学会の活動と使命の

考察を提供してきた。そのような彼のコミュニティと社会への薬学的貢献が評価され、今年の3月に米国薬剤師会(American Pharmacists Association: APhA)の名誉会員として表彰されている。現在の会長はCynthia J. Boyle(任期2025-2027年)、副会長はNancy Alvarez(任期2026-2028年)であり、6名の理事とともに各役員の任期が重なる体制をとっている。年会は毎年11月にオンライン開催されており、全会員には役員候補者を直接選挙する権利がある。また、AIHPの研修会や講演会はプログラムマネージャーであるKristen Husetを中心に企画されており、2025年からはAIHPのthe Pharmacy Historyワーキンググループは、Consortium for the History of Science Technology and Medicine (CHSTM)と共同でオンライン研修会の開催を開始した。なお、AIHPは昨年8月の大洪水による被害を受けたアーカイブと資料の再配置作業を進めるとともに、85周年のバーチャル歴史記念碑プロジェクトを構想している。

薬学研究発表の場はたくさんあります

五位野政彦

現在日本薬史学会年会には数多くの口頭、ポスター発表があり、日程が過密になるという嬉しい状況です。しかし薬史学会会員の皆さんは、ご自身の研究発表の場はこの年会だけだとおもっていませんか？ そうではありません。ここでは私が行ってきた薬学研究発表の場や関連する情報をお知らせします。薬史学会年会では発表しきれない場合の研究報告の場として、また薬史学の普及や会員リクルートの場としてご参照いただければ幸いです。

1. 学術集会

(1) 日本薬剤師会学術大会

毎年9月ないし10月に開催されているこの大会は、医療現場で活躍されている薬剤師の方々の研究発表の場です。薬に関するあらゆる分野の発表が認められています

(2) 日本薬学会年会

毎年3月に開催されており、もうすぐ150回(つまり150年)になるという伝統の薬学研究の発表の場です。現在でも発表分類コード1901として「薬史学」があります

(3) 日本医療薬学会

毎年秋に年会を開催しています。実は薬史学会年会の開催日に重なることが多く、なかなか参加／発表できないタイミングなのです。しかし病院薬剤師の歴史などを報告できる場です。

(4) 日本病院薬剤師会関東ブロック大会

これは毎年8月に開催されています。この大会も柴田フォーラムと日程が重なることが多いのが残念です。ここでも病院薬剤師／薬学の歴史研究発表が可能です。

(5) その他

わたしは前記(1)から(4)で薬学史に関する研究発表を行ってきました。ほかにも「日本精神薬学会」「日本社会薬学会」などでも行っています。ここでは医療薬学系学会のみをご紹介しますが、会員各位が別に所属している学会での発表もできると思われます。

2. 論文にできるのは「薬史学雑誌」だけ

これだけ多くの学会に薬学史に関する研究発表の場があるのですが、実際にペーパーにしようとする投稿規定の問題があります。例えば「医療薬学」「日本病院薬剤師会雑誌」は、病院薬剤部に関する歴史は掲載対象とならないのです。「日本精神薬学会雑誌」も同様です。「日本薬剤師会雑誌」には「会員報告」のカテゴリーで私の薬学史報告が掲載されたことがあります。以降は「掲載対象ではない」とされています。「薬学雑誌」では、「これは論文ではなく、読み物である」として査読にも回されなかった経験があります。

発表した研究を自身の業績とすることのできる、その最後の砦が「薬史学雑誌」です。先の薬学雑誌で門前払いされた論文は、軽微な修正だけで薬史学雑誌に原著論文として掲載されました。

皆さんにおすすめします。それはまずあちらこちらで発表すること。そして薬史学雑誌に投稿することです。薬史学雑誌のポリシーには、「教育的な観点」から投稿原稿をどのように修正したら論文として掲載できるか指導すること、があります。まずは身近な学会での発表からも始めてみてください。

五位野理事による動画「薬剤師研修センター単位を取得する方法」は、学会 HP 動画集

<https://plaza.umin.ac.jp/yakushi/movies/>

よりご視聴いただけます。

『多様な視点で見る：グローバル薬局に関する共通の見解、Seeing with Many Eyes: A Shared View on Global Pharmacy』(その1)

評議員 西谷篤彦

今回は昨年12月に参加したアメリカヘルスシステム薬剤師会(American Society of Health-System Pharmacists, ASHP) Midyear Meeting 2025 の Donald E. Francke Medal の受賞者講演を紹介します。

受賞者は Dr. ロバート・J・モス*(Robert J. Moss) (写真1)です。なお紙面の関係で数回に分けて紹介します。

Donald E. Francke賞(図1)：1971年 ASHP の評議員会は病院薬局の領域で国際的に大きな貢献をした人物を表彰するために、Dr. Francke (1910-1978) の栄誉を称えて命名された「Donald E. Francke Medal」を制定しました。ちなみに Dr. Francke は初代受賞者となりました。過去の Dr. Francke メダル受賞者を示します(表1)。

Dr. ロバート・J・モスの講演(その1)

薬剤師は、幅広い科学的背景を持ち、分野を横断して働くことに慣れています。医学と自然科学は、私たちが知識の源としてよく利用する分野です。

この講演では、これらの分野の科学文献に焦点を当てるのではなく、世界中の同僚との交流の中で得たアイデアや、世界の薬学がどのように発展し、そして今後どのように発展していくかについて、私の視野を広げるきっかけとなった書籍を講演の枠組みとして活用します。その範囲には、社会科学の分野も含まれます。

私が FIP に関わるようになったのは、ほぼ30年前、ヨーロッパ病院薬剤師会(European Association of Hospital Pharmacists, EAHP)にオランダ代表として参加した時でした。最初に衝撃を受けたのは、ヨーロッパ各国の病院薬局業務の発展過程が大きく異なっていたことです。共通していたのは従来の物流プロセスでしたが、調剤、品質保証、医薬品情報、ことに臨床サービスや患者さんの安全といった分野

は、それぞれ全く異なるペースで発展していました。次に気づいたのは、病院薬剤師が、患者が最善のケアを受けられるよう、業務の向上に非常に強い情熱と熱意を持っていることです。EAHP を通して、私は FIP に関わる機会に恵まれました。そこで観察された業務の違いはさらに多様で、経済的要因によってその違いが非常に大きかったです。

私にとってパキスタン出身の著名な同僚に会ったことは、大変大きな経験となりました。私は彼に薬局業務について尋ねました。オランダの名門病院薬局で働く誇り高き若き病院薬剤師として、私は彼がせいぜい物流中心の薬局で、臨床業務はごくわずかしかな行わないだろうと想定していました。彼が薬剤業務の立ち上げを支援した病院における自動化のレベルを説明した時、私は畏敬の念を抱きました。

それは当時、私たちが夢見ることさえできなかったレベルをはるかに超えていました。この経験から、私は世界の薬局に対して先入観を持って議論してはならないことを学びました。

2008年にスイスのバーゼルで開催された会議において、FIP病院薬局部会が「病院薬局に関するグローバル声明」を策定しました。これは、世界中から意見を集め、それらを将来の病院薬局のロードマップとなる目標へと統合するという、先見の明のある例であり、現在では「病院薬局に関するバーゼル声明」と呼ばれています^{1, 2)}。

Dr. Francke メダルの過去の受賞者の多くが、このプロセスにおいて重要な役割を果たしました。こうした共通の認識を持つことで、世界中の病院薬学実務の発展が促進されました。

ヨーロッパでは、EAHP がヨーロッパの状況を反映するために声明を採用しました³⁾。これらの声明をすべての活動の基本的な参照資料として使用することで、病院薬学実務は、一見非常に多様な実務



写真1 Dr. ロバート・J・モス

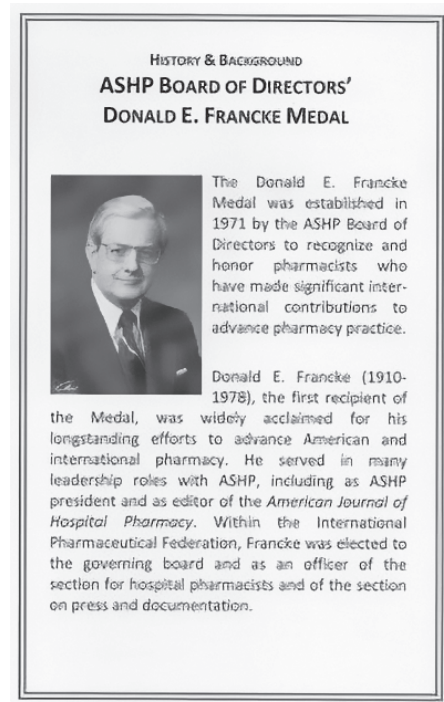


図1 Donald E. Francke賞

から、より整合性が高く、どの国でも他国から学ぶことができる実務へと進化しました。バーゼル声明はその後2回改訂され、病院薬学実務における新たな展開が取り入れられました^{4, 5)}。その中核は、今もなお世界的に関連性とインスピレーションを与え続けています。

バーゼル声明によって病院薬学にもたらされた統一性と同様に、FIP はより広範な世界の薬剤師専門職のための統一された拠点を構築することを目指し、「薬学および薬学科学教育に関する FIP 声明」を作成しました。これは2016年に南京で発表され、南京声明と呼ばれています⁶⁾。これらは、FIP の薬学人材育成目標(Pharmaceutical Workforce Development Goals, PWDGs)⁷⁾によるものです。これは、WHO の保健人材の課題に応じて2013年初頭に開始されたもので、薬学の教育と労働力に関するすべての問題を考慮して世界的に労働力を計画するための労働力育成ロードマップでした。

FIP は2018年にアスタナ宣言** (Astana declaration) に署名し、COVID-19パンデミックの最中、WHO とグローバルヘルスの提供における立場を確保するための特定の MOU (Memorandum

of Understanding、基本合意書)を締結しました。その後、次の改訂版である FIP 開発目標(FIP DGs)を発表しました。

13のPWDGsは現在、労働力よりも広範囲の主要分野の目標を含む21の開発目標に進化しました。FIP DGs は、薬学の実践、教育、科学を世界の健康ニーズと国連の持続可能な開発目標(SDGs)⁸⁾と一致させるための FIP の長期的な取り組みを表しています。

バーゼル宣言：これらは98カ国を代表する病院薬剤師による会議で策定されました。実務現場への導入は、世界的に均一ではありません。これは、医療制度の組織構造の違い、薬剤師の役割に対する考え方、あるいは財政状況の違いなどが要因と考えられます。また、宣言の実施方法が階層的な視点に基づいていることも一因かもしれません。

このモデルでは、高度なシステムの専門家が他者を同じレベルに到達させるのを助けると想定されました。生物学では、これは「互惠的利他主義、reciprocal altruism」と捉えられるかもしれません。これは、1970年代初頭に進化生物学者トリヴァースによって提唱された用語です¹⁾。

表 1.Donald E. Francke賞受賞者(1971-2025)

年	受賞者名	国
2025	Robert J.Moss	Netherlands
2024	Rosalyn Cain King	United States
2023	Vincent T.Idemiyor	United States/Nigeria
2022	Toyin Tofade	United States
2021	Lijian “Leo”Cai	United States/China
2020	Anthony Serracino-Inglott	Malta
2019	Albert I.Wertheimer	United States
2018	Abdul Latif Sheikh	Pakistan
2017	Marianne F.Ivey	United States
2016	Lee C.Vermeulen	United States
2015	Roberto Frontini	Germany
2014	Andrew Lofts Gray	South Africa
2013	Eduardo Osvaldo Savio Quevedo	Uruguay
2012	Henri R.Manasse,Jr.	United States
2011	Barry R.Goldspie	United States
2010	Agathe Wehrli	Switzerland
2009	William A.Zellmer	United States
2008	Jacqueline Surugue	France
2007	Toshitaka Nabeshima	Japan
2006	Philip J.Schneider	United States
2006	Thomas S.Thielke	United States
2005	Colin R.Hitchings	United Kingdom
2004	Dwight R.Tousignaut	United States
2003	Toby Clark	United States
2001	Joaquin Ronda Beltran	Spain
1996	Carl D.Lyons	United States
1995	Gloria N.Francke	United States
1986	Joseph A. Oddis	United States
1978	T.Douglas Whittet	United Kingdom
1971	Donald E.Francke	United States

彼は、警戒音から毛づくろい、食物の分配に至るまで、動物における無私の行動のように見えるものは、慈善行為としてではなく、パートナーが恩返しをすることで報われる、リスクの共有として意味を持つことを示しました。

鳥は潜在的な危険を察知すると警戒音を発します。個体レベルでは、静かに隠れている方が安全でしょう。しかし、個体群全体にとっては、警報を聞き、それに応じて行動する方が安全です。鳥類の個体群レベルでは、この相互関係が鳴き声の文化を安

定させ、群れ全体が一緒にいる方が、一羽の鳥よりも安全になるように進化しています。

これは国際的な薬学における協力は慈善行為ではなく、生存のためのものであることを知らせてくれます。一つのシステムが別のシステムを支えるとき、その恩恵は最終的にすべての人に返ってきます。世界的な導入は単一の「基準」を定着させる可能性があります。それは多くの点で有用ですが、必ずしもすべての場所に最適な基準とは限りません。(つづく)

*脚注1：Dr. ロブ・J・モスの略歴

現在、FIP (International Pharmaceutical Federation, 世界薬剤師連盟)の病院薬剤部会のヨーロッパ地域副会長、および欧州病院薬剤師協会理事会の専門能力開発担当ディレクター。

大学卒業後、オランダのハールレムで研修、引続き臨床現場で勤務し、その後ランゲ・ランド総合病院の薬剤部長を務め、ハーグにある中央病院薬局に勤務。その後、アムステルダム地域で6,000床の高齢者および精神障害者の薬剤師ケアを専門とする薬局であるファーマダムの薬剤部長を務めた。オランダ病院薬剤師協会の理事を務めていた際には、同協会の知識管理サイトを次のように立ち上げました。

目的：病院薬剤師が提供する医療ケアのレベル、領域、将来にわたる基準を定義し、世界的水準の向上を目指す。

内容：病院薬剤師が患者中心の医療において果たすべき役割を包括的にカバーしている。

背景：エビデンスに基づいた「病院薬局実務基準」を作成する必要性から生まれた。

なお先生の研究分野はITおよびeヘルス技術の最新技術を業務プロセスに統合することで、医療システムの最適化です。専門の分野は、糖尿病、老年医学、薬剤使用の最適化です。

****脚注2：アスタナ宣言：**2018年10月にカザフスタンで開催された一次医療に関するグローバル会議において、WHO、ユニセフ、カザフスタン政府が共催したものとして承認されました。それは、1978年に行われたプライマリ・ヘルス・ケア(Primary Health Care, PHC)への世界的な声明を更新し、ユニバーサルヘルスカバレッジ(Universal Health Coverage, UHC：すべての人が経済的な困難を伴うことなく、必要な時に、予防や治療、リハビリなどの質の高い保健医療サービスを受けられる状態)と2030年持続可能な開発目標(SDGs)の達成を目指しました。この宣言は、PHCがすべての人の健康を達成する最も効果的な方法であることを述べています。

参考文献

- 1) *International Pharmaceutical Federation (FIP)*. 22-10-2025; Available from: <https://www.fip.org/basel-statements>.
- 2) The Basel Statements on the future of hospital pharmacy. *Am J Health Syst Pharm*, 2009. **66** (5 Suppl 3): p. S61-6.
- 3) *European Association of Hospital Pharmacists*. 22-10-2025; Available from: <https://eahp.eu/european-statements-of-hospital-pharmacy/>.
- 4) Vermeulen, L.C., et al., *Revision of the International Pharmaceutical Federation's Basel Statements on the future of hospital pharmacy: From Basel to Bangkok*. *Am J Health Syst Pharm*, 2016. **73**(14): p. 1077-86.
- 5) Stepanovic, M., et al., *The 2024 updated Basel Statements on the future of hospital pharmacy*. *Am J Health Syst Pharm*, 2025.
- 6) Law, M., et al., *The FIP Nanjing Statements: Shaping global pharmacy and pharmaceutical sciences education*. *Res Social Adm Pharm*, 2019. **15**(12): p. 1472-75.
- 7) *International Pharmaceutical Federation (FIP) Workforce*. 22-10-2025; Available from: <https://www.fip.org/workforce>
- 8) *International Pharmaceutical Federation (FIP) Development Goals*. 22-10-2025; Available from: <https://developmentgoals.fip.org/>

会員特典として薬史レターへのご寄稿をお待ちしております。

投稿原稿料は無料です。

<https://plaza.umin.ac.jp/yakushi/publication/letter/>

〔Book紹介〕

船山信次（著）

「日本人はいかにして毒と薬を食べてきたのか？」（星海社新書 371）

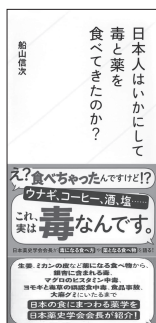
新書判 256頁 1,595円（講談社 2026年1月21日発売）

ISBN 978-4065423431

毒抜きや毒殺に始まり、カネミ油症やヒ素ミルク事件などの教科書に載るような食品事件から、近年の意図的混入による有毒ワイン事件や粉ミルクへのメラミン混入事件、伝統的毒抜きを行わなかったことによるシロインゲンマメ事件、各種有毒植物の誤食事件など、薬食同源あるいは薬毒同源として、古今東西の様々な毒と食の関わりが、著者の体験を含め示されている。

また、江戸わずらいとされた脚気、聖アントニーの火とされた麦角中毒など、栄養欠乏やカビ毒が原因の疾病が転地療養で異なる食事をすることで治療されていた事例も紹介されている。

この他、医薬品との相互作用、サプリメント、嗜



好品、違法薬物に至るまで、幅広い内容が取り上げられ、Food と風土などのユーモアある表現も、読者を飽きさせない。

特に、人はむしろ有毒なものを、量の調節や毒抜きの工夫で積極的に食べていたのではないかの考察は、毒から薬が見出されていったこととも関係し、興味深い。

食品分野への薬学からのアプローチの必要性とともに、薬史学の対象としても追求が必要であると感じた。折しも、食品衛生法の改正で、GMP や健康被害報告のため、サプリメントの定義が検討され、食の1次機能、3次機能をベースに「通常の食事による栄養摂取又は生理機能の調節を目的」とする議論が進んでいるところであり、関係者には一読をお勧めしたい。

（齋藤充生）

正誤とお知らせ

本紙96号につきまして、以下のとおりお知らせいたします。

p.1 日本薬史学会2026年度の主要行事のご案内

誤：3. 日本薬史学会2025年会(仙台)の開催日について

正：3. 日本薬史学会2026年会(仙台)の開催日について

p.9 西谷篤彦先生原稿のタイトル

誤：アメリカ薬剤師会日本使節団(1947)の勧告について

正：アメリカ薬剤師会日本使節団(1949)の勧告について

なお、本稿掲載後、p.10写真の花束贈呈者の服部徳子氏は、第12代日本薬学会会頭(昭和14年4月～15年3月)を務めた服部健三東京帝国大学教授(昭和17年逝去)のご令嬢との情報をお寄せいただきましたので、合わせてお知らせいたします。

薬史の昔を語る 日本薬史学会年会(秋季)の始まり

五位野政彦

毎年秋に開催される日本薬史学会年会は、会員の皆さんにとって最もなじみのある研究発表の場ではないでしょうか。ポスター、口頭いずれでも研究発表の場が用意され、年会賞なども充実してきています。

この秋季年会は第5代会長の山川浩司先生の発案です。

例年3月に開催される日本薬学会年会は、1990年代までは部会制をとっていました。創薬や公衆衛生その他多くの部会があり、その中で各々の研究者が自身の研究発表を行っていました。「薬史学部会」は1955年から開催されています。しかし1999年に徳島で開催された薬学会年会から発表形式が変わりました。「薬史学部会」は発表コード「薬学史」となり、個人でポスター／口頭発表を行うものを年会参加者全員が見ることができるといって現在の形式になったのです。

山川浩司先生は薬史学会独自の発表の場を設けようとして、薬史学会年会を企画しました。そして2001年にご自身が教授を務められていた東京理科大学において最初の年会を開催しました。その後秋季の年会が日本各地で毎年開催されているのです。

その第1回の年会「日本薬史学会平成13年秋季年会」のことを思い出してみましょう。11月10日土曜日当日の天気は悪かったものと記憶しております。この第一回の年会は口頭発表のみで、13題の研究報告がありました。質疑応答を含めて20分の示説時間だったのですが3ベルが鳴っても話し続ける発表者もあり、大幅に時間が延

びてしまいました。どこでも第1回というものは何らかのトラブルがあるものですね。

当時はパワーポイントというものはまだ普及していませんでした。一般の学会でもポジフィルムのスライドやOHP（若い方はご存知ないかもしれませんが）というものを映写していた時代です。私もここで発表していますが、OHP資料を作成して説明したものでした。

この2001年実施年会の講演要旨は薬史学雑誌36巻2号(2001年)で読むことができます。また募集要項などが薬史学会通信31号(2001年2月)に、プログラムが32号(2001年9月)に見られます。

さきほどお話ししたように、パワーポイントでなくOHPを使用した時代です。参加申し込みもインターネットや電子メールなどは使えませんでした。パソコンのワープロソフトやまだ現役で使用されていたワープロ専用機などで申込書や講演要旨を作成し、それを郵送するものでした。別な昔話をしますと、春の日本薬学会年会での講演要旨も、ファルマシア誌の年会前年の11月か12月号の巻末に綴じこまれた専用の原稿用紙に記載する、そのような時代がありました。いまこのことを覚えている方はどれだけおられるでしょうか。

この年会以前にも、総会講演会とは別に秋季講演会や日仏薬学会共催の講演会などが秋に実施されていました。そのことはまたあらためてご紹介しましょう。

日本薬史学会編集委員会

編集委員長：齋藤 充生

編集委員：赤木 佳寿子 武立 啓子 牧 純

薬史レター 第97号

2026年9月

編集人：齋藤 充生 発行人：船山 信次

日本薬史学会 The Japanese Society for the History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (一財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局

tel : 03-3817-5821 fax : 03-3817-5830 e-mail : yaku-shi@capj.or.jp

<https://plaza.umin.ac.jp/yakushi/>

所属先、住所、アドレスなどの変更が生じた場合には、学会事務局へ必ずご連絡ください